遺跡からのメッセージ（61）

唐古・鍵遺跡の外来系土器から見えるもの

天理大学文学部教授
桑原　久男　*Hisao Kuwabara*

平成25年（2013年）11月、田原本町の唐古・鍵遺跡で弥生時代中期中頃（前200年後頃）の北部九州地域の土器片1点が見つかった、とのニュースが伝わった。ただし、土器片が出土したのは、昭和63年（1988年）2月のこと。長年にわたって唐古・鍵遺跡の調査に取り組む藤田三郎氏が、集落を囲む環濠から出土したコンテナ約80箱分の土器片を25年ぶりに再整理するなかで、新たに見いだしたのだ。口縁部をL字状に折り曲げ、赤く彩色する特徴をもつこの土器片は、研究者によって「須玖（すぐ）1式」と認定され、奈良盆地と北部九州の弥生時代社会の間に交流があったことを示す初めての具体的な証拠となった。そもそも唐古・鍵遺跡では、ひとたび発掘調査を行うと膨大な土器が出土するが、他地域から運ばれた外来系土器が占める比率は3～5%と言われている。膨大な土器片から貴重な資料を見いだした藤田氏の努力には頭が下がる。

写真　唐古・鍵遺跡の外来系土器

100次を越える唐古・鍵遺跡の発掘調査では、これまでにも多数の外来系土器が確認されていて、唐古・鍵考古学ミュージアムでその一部を見ることができる。外来系土器については私もかねてから関心をもっていて、唐古・鍵遺跡など、奈良盆地の弥生時代遺跡からの出土資料について検討を行ったことがある（桑原久男「搬入土器の動向からみた弥生時代の奈良盆地」『技術と交流の考古学』2013年、同成社）。具体的には、印刷物としてデータ化された資料349点に、桜井市纒向（まきむく）遺跡の123点を加えた472点について、時期的な動向を整理したのだが、いろいろと苦心した。たとえば、外来系土器といっても、「身元」と所属時期が判明している資料は限定され、また弥生時代後期になると、のちの「畿内」に該当する地域で土器の共通化が進み、近隣地域からの外来系土器（搬入土器）を識別することが困難になる。

こうしたバイアスが存在することを踏まえ、「身元」と時期がわかる外来系土器のうち、「奈良盆地周辺地域」（河内・和泉・山城・紀伊・摂津）の資料を省いた331点について、「東海系」「瀬戸内系」「近江系」と大きく区分し、時期的な比率の変化を図に示した。ちなみにⅠ期～Ⅵ期の時期区分は、藤田氏らが旧来の土器編年に修正を加えたもので、Ⅰ期が弥生時代前期、Ⅱ期～Ⅳ期が中期、Ⅴ期・Ⅵ期が後期となる。大きな傾向として見て取れるのは、Ⅰ～Ⅵ期のなかで、「瀬戸内系」、「東海系」の比率が、時期によって大きくなったり、小さくなったりと変動し、その間に挟まるように、「近江系」が一定のプレゼンスを示していることだ。つまり、Ⅱ期（中期前葉）には伊勢・伊賀・尾張・三河など「東海系」が卓越していたのが、Ⅳ期（中期後葉）には「瀬戸内系」（吉備・播磨）が逆に主流を占めるようになる。Ⅳ期に「瀬戸内系」が多数を占める現象は、この時期の奈良盆地の弥生土器そのものが、凹線文の盛行など、器種、文様、製作技術のさまざまな点で瀬戸内地域からの強い影響を受けていることとも連動する。当時、奈良盆地の弥生社会と瀬戸内地域の間に活発な交流が存在し、人々や物資、情報の行き来があり、その延長上に北部九州が存在することを、新しく見つかった「須玖1式」の土器片がはっきりと示したのだ。

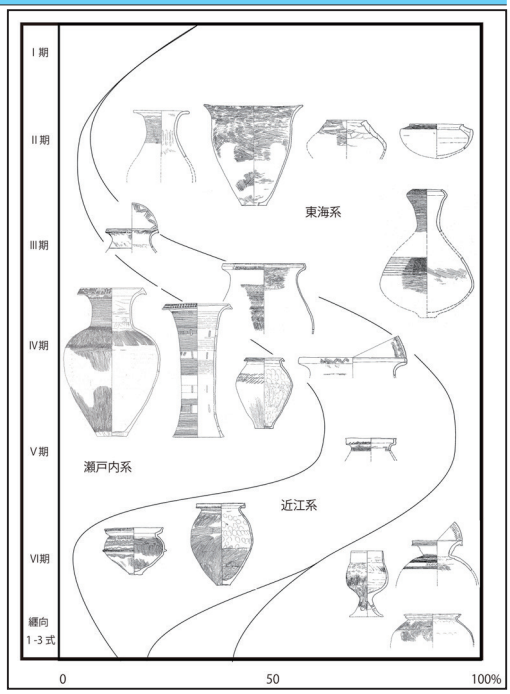

図　奈良盆地における外来系土器の動向

ところが、「瀬戸内系」の卓越はⅤ期（後期初頭）に終焉を迎え、今度は、それと入れ替わるように、「近江系」が著しく増加する。近畿地方の弥生土器は、Ⅴ期・Ⅵ期（後期）になると文様を失ってしまうが、近江の土器は、口縁部や肩部に櫛描文が施されるなど、独特の特徴を持つ。10年ほど前になるが、韓国の金海貝塚で近江系土器が出土したことが確認され、「近江系土器」を介して、近畿地方と朝鮮半島南部が接点をもつことになった。奈良盆地の弥生後期に「近江系」が席巻する、その延長上には朝鮮半島が存在しているのだ。もしかすると、瀬戸内ルートが閉塞したことで逼迫した奈良盆地の弥生社会が、近江を経由する日本海ルートに活路を見いだしたということだろうか。ともあれ、朝鮮半島南部の倭系文物が弥生時代中期までは北部九州系中心だったのが、古墳時代前期には近畿系の遺物が主流を占めるようになる、その変化の起点が弥生後期の段階（紀元後1～2世紀）にあることがわかる。しかし、奈良盆地では、古墳時代の初頭（纒向遺跡の時期、2世紀末～3世紀）になると、「東海系」が再び勢いを増すと同時に、「瀬戸内系」も復活し、広範な地域の外来系土器が出土するようになる。全方位的な地域間関係が成立する新たなステージに入ったのだ。交通ルートや地域間の関係が政治情勢に左右されるのは古今東西によくある話だが、弥生時代中期から古墳時代初頭にかけての外来系土器の動向も、奈良盆地の地域社会が大きな歴史の流れに翻弄された一幕を映し出している。